実践研究報告書

高知県立中村高等学校　庄﨑里華

１．研究の成果と課題をふまえた平成 26 年度の実践内容

「英語で行う授業」という研究テーマで，言語活動を中心としたシラバスを構築し，授業方法の改革に取り組んできた。定期試験を，英語の使用場面を意識させた新しいタイプのコミュニカティブなものに改良し実験を行った結果，言語活動として設定した「ディクトグロス」ならびに「英語で行う授業」の効果があったという検証結果であった。しかしながら，実際に生徒たちが「英語を使える」ようになったかというと，些か疑問が残った。そこで，実践２年目は，授業自体を評価と統合するために、紙ベースの定期試験を無くし，生徒たちのパフォーマンスですべての評価を行い，「英語を使用すること」を中心とした授業へ構成し直した。

さらに，「言語活動を中心とした CAN-DO LIST」を作成し，スキル面と情意面の両面から自分の成長を確認できるよう１枚のシートに集約し，生徒自身が自分の成長を確認できるようにした。

1.1 英語表現Ⅱの取り組み

スピーチ･プレゼンテーションの機会がそれぞれ 4 回与えられ, インタビューテストを 2 回実施した。さらに 3 回のディスカッションを行い，３学期の最後にディスカッションテストを行った。以下，評価の流れである。

表１　年間評価の流れ

1 学期中間	Speech 発表	Speech 発表	Interview Test	Comm-Gra Test-①	Hunting Sheet-②
1 学期期末	Speech 発表	Speech 発表	Interview Test	Comm-Gra Test	Hunting Sheet
2 学期中間	Presentation (individual)	Presentation (individual)		Comm-Gra Test	Hunting Sheet
2 学期期末	Presentation (pair)	Presentation (pair)		Comm-Gra Test	Hunting Sheet
3 学期学年末	Discussion	Discussion	Discussion	Discussion Test	Hunting Sheet

Comm-Gra Test-①：Communicative Grammar Test の略で，言語使用場面を意識し，状況にあった英文を選択できる力を図るために，既習文法事項を盛り込んだコミュニカティブなテストである。

Hunting Sheet-②：50 分授業内のどこかで 15 分以内に行う「英語使用を目的とした言語活動(1 min. Talk, Dictogloss, Mini Debate 等)」を関心意欲態度・表現・知識理解の 3 観点から評価し、一覧表にしたものであり，獲得した得点は自分の目で見て弱点が確認できるようになっている観点別評価シートである。

【それぞれの内容】

Speech：「自己紹介」「お勧めの場所」「心配事」「もしも〇〇になったら･･･」

Interview Test：上記の内容に関するランダムな内容の質問

Presentation（前半は個人，後半はペアで，会話形式でのプレゼンテーション）

：「思い出の場所」「世界の国について」「お気に入りの食事の方法」「携帯電話の歴史について」

Discussion（2～4 人のグループで自由にディスカッション）：「家族のルールについて」「E-mail は最も良いコミュニケーションツールではない」「環境のためにできること」

1.2 評価方法

パフォーマンステストには，インタビューテスト・音読テスト・スピーチ・プレゼンテーション・ディスカッションが含まれ，それぞれのパフォーマンスに応じ，以下のように評価している。

表２

<table>
<tr><th>パフォーマンステストの種類</th><th colspan="8">評価の観点</th></tr>
<tr><td>音読テスト</td><td colspan="2">時間制限</td><td colspan="2">発音・アクセント</td><td colspan="3">自然なイントネーション・ポーズ・強勢</td><td>適切な音量</td></tr>
<tr><td>インタビューテスト</td><td colspan="3">Full Sentence</td><td colspan="4">Grammatically correct sentences</td><td>One word</td></tr>
<tr><td>スピーチ</td><td colspan="2">発音</td><td colspan="2">暗記度</td><td>Delivery</td><td colspan="2">適切な音量</td><td colspan="2">自然なイントネーション・ポーズ・強勢</td></tr>
<tr><td rowspan="2">プレゼンテーション</td><td colspan="5">伝わる工夫</td><td colspan="3">掲示資料の工夫</td></tr>
<tr><td colspan="2">分かりやすさ</td><td colspan="2">適度な速度</td><td>Delivery</td><td>適切な音量</td><td>Fluency</td><td>Layout</td><td>Timing</td></tr>
<tr><td>ディスカッション</td><td colspan="2">議論の
噛合い具合</td><td colspan="2">主張がある</td><td>理解できる
主張</td><td>主張の根拠</td><td>主張に
対する意見</td><td>伝えようとする
意思</td><td>Filler
の使用</td></tr>
</table>

２．平成 26 年度の実践の成果と課題

自己表現力を高めるために，英語を使用する際，間違うことを恐れず挑戦するように指導を重ねてきた結果，最初は抵抗を感じていた生徒も，1 学期の半ばから「伝えるための活動」を楽しんでいる姿が見えはじめた。その後，友達あるいは教員に伝えるための工夫を考えるようになり，言語活動の延長を申し出る生徒も増えてきた。年間を通じて毎時間言語活動を行っているため，生徒たちは英語使用に対する抵抗が減少してきたように見える。最初は，英語でのコミュニケーションに不安を感じていた生徒たちも，相手に「伝える」ために工夫を凝らすようになってきた。発話できる語彙が少ないがために，コミュニケーションが持続しない生徒についてはペアリングを工夫したり，ヒントとなる語彙を板書したりしながら持続できるよう考えている。時には，No Gesture，　No Japanese という指示を楽しみ，必死に文レベルで伝えようと努力する生徒の姿も見受けられた。50 分間フルタイムでの英語使用を強要するわけではなく，言語活動を行う際は「相手に伝える・相手を理解すること」を目的としているので生徒たちはコミュニケーションを通じ，意図することを伝えようと努力している。

年 2 回行われる，ベネッセ・スタディーサポートの学習リサーチ結果を見ると，調査カテゴリーの「英語を習得したい程度」における「日常～将来での活用」という項目の割合が，全国平均を大きく上回っている。さらに，学力結果を見ると，応用問題の読解に関する評価が「国公立・中堅私立大挑戦レベル」に達してきており，定期試験を行わず，パフォーマンス評価を基本とした授業を取り入れても，模擬試験等の結果が下降するわけではないと言えよう。

ペーパーテストで評価できる英語力は，実際に英語を使用しコミュニケーションが図れる力とは必ずしも一致しない。例として，ペーパーテストで得点率が高い生徒ほど，英語使用に対して躊躇することが多いように感じる時がある。得た知識を実際に使えるものにするためには，自分の身近なものと結びつけながら何度も使用し慣れていくのが最善策ではないだろうか。

「言語習得」に至るまでの過程には，個人によりさまざまな課題はあるが，実際に使用することを意識しなければ，ペーパードライバーと同様に，「習得」できない生徒が育成されてしまうのは当然である。実際，生徒たちは自分のパフォーマンスが評価されるので，目の前の状況を判断し，相手に伝わる適切な英語を選択し，表現していく必要があるため，語彙を記憶したり，書いたり読んだりする力だけでなく，「英語を使用する」ことに意識を向けることができたと感じる。

活用を意識した授業と大学受験との矛盾を教員間でよく耳にするが，大学受験はあくまでも通過点にあり，われわれ高校英語教員は，その先を見据えた英語教育を考え授業実践を行わなければならないと考えている。言語環境上，完全な英語習得者となるのが難しい現状がある以上，教員自身が英語力を向上させ続ける努力は当然ながら必要であり，教員が英語使用せずして生徒の「言語習得」を目指すことは不可能である。「英語が使える日本人」の育成に貢献すべく，ともに成長を続ける必要があると感じる。